

分いろんな人に出逢ひますが、おそろく貴君ほどの健談家はない、實に壯んだ、失禮ながら傍で見て居ても氣持が善くなりますよ、わけて老衰した元氣の薄い我我には羨ましく感じます、あれだけの健談家には必ず、それだけの活動が出来るに相違ない、つまり食物は汽車に於ける石炭ですからな」

「いや、汽車に於ける石炭かも知れませんが、今も申上げる通り、たま〜あ〜いふ石炭を喰ひに這入るのは月に一度、あるかなして、實は年が年中、躰層を焼てる不完全な汽車ですから、なか〜容易に動きませんよ、殆どレールに腐り付た居坐りです、はッはッはッ時に阪崎さん、今日お伺ひ致しましたのは」

「は、わかッて居ります、今朝、木村さんからの電話で、ちよいと聞きましたから、あらかた承知して居ますが、その稲田といふ方が貴君とは案外だッた、は〜、しかし稲田

さん、あの保險會社も困ッたもんですなア、自分の迂濶は迂濶ですが、まさか、あれほどの内情に悲境を來して居たとは今日まで少しも知りませんでしたよ、始めて驚きましたね、よくまア外面に現はれなかつた事です、勿論、木村さんといふ老功の銀行家が蓋をして居ッた、からでもありませうが、ふしぎに堪へて來ましたね、比較的、大株主の部になつてる阪崎です、打明けて内情を聞いた以上、此ま、傍觀しても居れない、ついでに木村さんから善後策の當事者として貴君を向けて來られたンですが、どういふ名案がありますか、兎に角、御意見を承はりたい」

たま〜月に一度の洋食屋へ飛込で、喰ひぬけの健談を驚かせし一作と、その胃袋に呆れし阪崎莊平と、わづか三日と隔てし今こゝに期せずして意外の會談は、既に一種の奇縁と滑稽を帯びて、いかなる難問題も角立たず、丸く滑かに自然の人情を含みぬ、

加之も主人の阪崎老人は説かるゝ地位に身を置いて、なり／＼目鏡越の眼を光らせど、これに對する一作は説くべき地位に身を置いて、絶えず満面の微笑を浮べながら語りぬ、

「まだ乳臭い若輩者が老功の紳士に對するのみでなく、その利害上から押して見ても、殆ど有無に關しない僅少の端た株を持つてゐる奴が全體の三分一を有する大株主に對して、甚だ差出がましい次第ですが、兎も角も阪崎さん、あの保險會社あのみまゝでは到底自滅の外アありませんまい、それに就ての御意見はいかゞでしやう」

「さア、そこですよ、實は一昨年、病氣のため監査役を辭して以來、比較的たゞ株の數を持つてるといふのみで、とんと内情を知らずに居りましたが、昨夜、木村さんから實際の悲境を打明けられて、や、驚きましたね、始めて驚きましたよ、ところが、その内談中に貴君が出ました、かういふ人間で、まだ年は若いと思議に頭腦も手腕もありさう

だから、一番これに働かして見たいといふ事です、深い關係は知りませんが、よほど木村さんは貴君を信任して居られるやうだ、つまり私に逢つて見てくれといふ事です、私に對しての意見は貴君にある筈だ、木村さんと私とは十餘年來の交際上、多少の利益は互ひに抱合つても堪忍しなければならぬほどの間柄です、遠慮なく打解けて露骨に思ふ存分に御意見を演べて下さい、平穩無事の時は兎も角、何等か事のある時には、やはり將來の多い戦鬪力の満ちた少壯家に限りますよ、時勢の足早に後れて年齢ばかり先へ取て第一また利害の深い大株主といふ奴が世間の實例上、いつも却つて會社のためにならないやうです、つまり取返しが出来ない過去の詮鑿ばかり喧しくつて引ツ込み思案の外なるべく戦線に近付て矢玉に中らない工夫をしますから、はゝゝゝいや、他の事でない、もはや我々も自然その仲間です、はゝゝゝ」

圓轉滑脱この老爺、なかく面白く話せるわいと見て取りし一作、おもはず椅子を進めて
ますく溢るゝ額越の微笑、

「いち／＼さういふ御言葉では困ります、恐縮の外に何事も申上げる餘地が御座いませぬ、
十中の八九までは實のところ、お叱りを蒙る覚悟で伺つたものですから、どうか御教訓
的に御談話を願ひまじやう、ついでには、この壽福生命保險會社なるもの、元來が株式組
織で成立つてゐる以上、當事者の徳義問題とか責任とかいふ者は暫く別として、もはや事
こゝに至つた現在の會社は、勢ひ株數の最も多い貴君に生命を託して居りますから、ま
づ貴君の御決心を聞た上でないと、他より意見の陳べやうも手段の施しやうも御座いま
せん、いかゞでしやう阪崎さん、人力の及ぶかぎり出來得るだけの遺憾なき方法を講じ
て今この會社を解散的に潰した方が宜いでしやうか、但し忍び得るかぎりの惡戦苦闘に

堪へられるだけの犠牲物を供しても無理に立てた方が宜いでしやうか、不肖ながら、お
言葉に甘へて露骨に申せば、雙方いづれにも確實なる成算を持つて参りましたが、まづ
その御決心を伺ひたいもんですなア」

壽福生命保險會社の大株主として、今が危急存亡の間一髪、これを立てるか潰すかと問はれ
し阪崎莊平、おもはず目鏡越しに老の眼を光らして、じつと一作の顔を打守りぬ、

「なるほど、木村さんが信任して向けられただけの貴君ですなア、いかにも念の押しやう
が、きび／＼として面白い、世間普通の人情、かういふ場合には無理にも立直す一方に
のみ熱中して騒ぐ筈を、反對の冷静に考へて、潰す方にも潰し工合の成算を持つて來ら
れたところは、實に恐れ入つた、無論この阪崎莊平は自分に多少の不利益を供しても會
社のために忍びますよ、到底、人力に及ばざる自滅は致方ないが、もし人力に及べば許

すかぎりの犠牲物を出しても、どうか今日の悲境を救ひたい覺悟です、稲田さん、それに付ての挽回策を伺はう」

「や、よく了解いたしました、木村さんと貴老の持株を合せば會社全體の總株數に對して三分の一ですから、つまり此會社の生命に關して貴老方お二人の利害が最も多い、その利害の最も多い大株主が一致して忍び得るだけの不利益も構はないといふ御決心のある以上、もはや既に天下三分の計が成立つてゐる理由です、よし會社の内情が曝露して、たとひ他の株主が蜂の巣を突破つたやうに、わい／＼騒いだところで、なアに押へきれない事はありますまい、もし悪く組合へば敵として戦つても充分、戦へます、三分の一の株は會社の五體としても勢力の比較上、たしかに左右二本の手ぐらゐに當りますから、どんな深い穴へ全身が落入つたにしろ、雙手を擧げて掻き上げれば、きつと掻き上げます、

まして世間の一般財界より直接の手厳しい影響を蒙る他の會社事業と違ひ、その性質上、割合に波動を感じない特種の點を備へた保險業ですもの、主務省に睨まれざる限り、被保險者に肉薄されざる限り、いはゞ株主同士で一家内の兄弟喧嘩ですから、最も勢力の大きい株數の多い兄分の貴老方さへ慎重の態度で寛大の雅量で、堪忍すべきところを堪忍して下されば、なアに最後の結果は大丈夫です、つまり今日の悲境を來した重なる原因は、他の保險會社と競争の極、あまり被保險者の診断を緩漫に取扱ひ過ぎたがため、契約高に對して死亡率の案外に増加したのと、収入保險料に對して營業費の過大に膨脹したのと、第一は會社の生命ともいふべき資産の部に運轉放資の状態を誤つて、殆ど固定して仕舞つたからです、加之も其固定物が今日の時價に見積つて平均、買手としても三四割方の以下ですから、一朝もし賣手となれば迎も堪りませんよ、幸ひ社長たる木村さ

ンに關東銀行といふものがあるため一時それを母として、どうか斯うか今日まで無理に乳を吸って來ましたが、さう間斷なく多量に吸はれては母親も叶はない、また子の方でも近來の瘦方が激しいから世間を憚る貰ひ乳ぐらゐでは到底、營養不十分です、満足に肥て行きません、しかし大體の性質が病身でないから今のうち何とかすれば、必ず元氣を回復して達者になるものと信じて居ます、それに付て醫藥的の滋養分には、もはや他に求むる道がない、勢ひ已むを得ず、この會社の生命に三分一の割前を持って居らるゝ木村さんと貴老の株を、まづ半分程損して下さる覺悟なくては無効で御坐いましやう、死んで仕舞へば全然、零になる株を半分、こゝに残して、捨てた半分で會社の生命を繋かうといふ理由です、會社さい無事に育つて成長した曉は、その捨てた半分も再び貴老方の手に戻る筈です、つまり株の數に於ては減つて居ても、會社の立直つた時價としては寧ろ

「今日よりも御利益の多い勘定ですが、これに付ての御意見は、如何でしやう阪崎さん」
 阪崎莊平、暫し無言のまゝ目鏡越の老眼を閉ぢて考へしが、組みし腕を解て俄かに首肯

「よろしい、會社の滋養分として私の持株を半分、捨てましやう、無論、木村さんも半分は損する覺悟でしやう」

「そりやア固より、その覺悟です、時と場合に依ては悉皆、抛出して仕舞つても宜い覺悟です」

「なるほど、さうですか、いやわかりました、ところで稲田さん、我々二人の持株さへ損をすれば、それで會社が立ち行きますか」

「甚だ言葉に禮を缺きますが、稲田 一作、疊の上で泳ぎません、水の中へ飛込で泳ぎます

稲田 一作

から實際を御覽下さい、しかし何處の岸から泳ぎ出して何處の岸へ着くといふ方針だけは前以て申上げて置きましたやう」

言葉と共に右手をポケット差入れて細字に認めたる一葉の數字表と二枚つゞきに計畫せる意見書を取り出しぬ、

「阪崎さん、いよくとなれば、これが生きて働くんです」

門の戸の開く音、入口に訪ひ來し男の聲に、お常、立出で、見れば紡績飛白の羽織を着流せし三十四五の八字髭、古びたる烏打帽を脱で懸敷の體、

「稲田さん、御在宅で御坐いますか」

「はい、生憎く只今、出ましたが、どなた様で」

「島田といふモンです、一昨日、三十間堀の〇〇屋で御馳走になつたものです、貴女ア奥さんですわ」

「おや、まア、どうか、お上り遊ばして、さア此方へ、其うちに歸つてまぬりませうから」

あの時は幸ひ階下の一室で顔も合さず、また五十圓の金には聊か眉も擧めしが、來れば良人の恩人として溢るゝばかりの愛嬌に迎へ入れ、加之も流石に人馴れたる身の届かぬところなし、

「始めて、お目にかゝりますが、常と申しまして、一作の妻で御座います、さア、どうかお平座に」

稲田 一作

「は、有難う御座います、お禮、かたく實は昨日、伺ほうと思つて居りましたが何分、少しも身體に閑暇のない勤務で」

「恐れ入ります、とんだ事を貴君、手前こそ兼々お噂を承つて居りますから是非、お禮に伺はなければ濟まない筈で御座います、が存じながら、つい御無沙汰に打過ぎまして」

「いや、どうしまして、時に稲田さん今日は御遠方ですか」

「はい、御承知の通り萬事あゝいふ良人で、今日に限らず何處と申しても出ませんが、何、もう其うち歸りましましやう、別段お急ぎの御用がなければ暫時の間、ちよいと心當りへ電話をかけますから」

「や、それに及びません」

靜かに四邊を見廻しながら、懷中より取出せし一封を、お常の前へ差出しぬ、

「稲田さんより貴女の方が却つて幸ひです、一昨日、いろく御馳走になつた上、小兒への土産として、これを下すつたんですが、歸つて見て驚きました、眞實、小兒への菓子料と思つて居ましたに案外の五十圓、かういふ過分の金子は甚だ困ります、どうしても戴くべき理由がありません、御芳情は有難く、決して辭退いたしませんから、もし下さるならば改めて一圓か二圓、それ以上は謹んで御返納いたします、無論、稲田さんの今日に於ける御身分へ對して、お返し申すでない、實際、私の身分として受け兼ねる理由です、なアに僅か三日か四日、それも只その時の雨露を浚いだけかりで、かういふ禮物を受る筈がありませんから、この邊を悪からず、よく稲田さんへ御傳へ下さい、折角の思召を御遠慮しません、其うち一圓か二圓、小兒へ戴いて歸りましましやう」

だしぬけの不意に無理工面さゝれし時は兎も角も、はや一旦、出して仕舞へば目にも觸れ

さるお常、思はず膝を退きながら手を打振りぬ、

「あら、貴君、どういふ御用かと思ひましたに、そんな事をなすつては困りますよ、そりやア貴君、いけません、いくら何と仰しやつても、無効で御座います、もし不在中これを此まゝ預つて御覽あそばせ、あの氣性ですもの、迎も無事では済みませんよ、すぐ其場で妾が追出されて仕舞ひますから、ほゝほゝ」

折しも玄關の格子戸、がらりと開きぬ、

歸り來りし一作、靴の紐を解きながら、迎へ出でしお常を振り返りぬ、

「見馴れない男の下駄があるね、誰か來てるのかい」

お常は差寄つての小聲、

「一昨日の巡查さんですよ」

「はゝア禮に來たのか」

「禮も禮ですが、あの五十圓、あれを返しに來ましたの、小兒の菓子として一二圓は戴くが五十圓は貰へないといふ理由でね」

「器物の小さいもんだな、たつた五十圓が這入らないか、や、よし、乃公が押込でやらう、酒でも出してやれ、よほど飲めろらしいぜ」

すつと通りて顔を見るや否、

「やア、よく來て下すつた、遠方のところを、ちよいと電話でもあれば待つて居ましたに、

今日は已むを得ない用があつて此無精者、いつにない朝から飛出しましたよ、はゝゝゝ、御免下さい、久しく開つ放しの奴が急に身體を包まれると、どうも坐れない」

其まゝ大胡座を掻きながら、ふと例の一封に目を注いで俄かの尖り聲、

「おい、こら常、こりやア何だ、かういふものを汝の手から差し上げるといふ事があるか、失禮な奴だ、一昨日は乃公の手から世間普通の目録として出せば、そ無理に受けて下すッたんだぞ、それに汝また重ねて、全體どういふ量見だ、馬鹿、よく御謝罪して引ッ込める、實に物の前後を知らない女で困りますよ、あしからず」

「あら良人、妾が、さうぢやアないんですよ」

「さうぢやアない」

「一昨日、良人から差上げたのを、今日、わざと返しに入らしッたんですよ」

「ふん、さうかい、はッはッはッ、しかし汝、それにしても不可ぞ、乃公の歸るまで何故、一旦さし上げたものを汝、かう宙に浮して置くんだ、ぼんやりと氣の利かない女ぢやアないか、こんな事で亭主の留守を預ッて居れるかい、まぬけ女、世の中は乃公に對する

嬢アの役目ばかりで済まんぞ、他に對しても良人の妻たる働きを仕ろッ」

徹頭徹尾、お常を叱り飛ばして目を割出せば、あまりの不意に呆れて聊か狼狽へ氣味の查公、俄かに其一封を押戴きぬ、

「いや、稲田さん、改めて頂戴いたします、ありがたく此まゝ戴きます、決して奥さんに、彼是と、それぢやア實に困りますよ」

一作、微笑を浮べて振返りぬ、

「おい常、無事に納ッたぞ、はゝゝゝ氣にするなよ、汝を叱ッたのも御馳走の一種だ、嬢アを叱る御馳走は無代價で調法なもんですよ、はゝゝゝ」

さらぬも恐縮の查公、ますゝ恐れ入ッて歸りし後、ぬッと立ちし一作の背後より、お常その洋服を脱がせながら、

「あゝ女は、つまらないもんだ事」

一作、振り返りて笑ひぬ、

「は、ちよいと今日の役廻りが悪かつたね、しかし女といふものは表面に現はれて目に立つ手柄より、つまらない蔭に價値のあるもんだよ、汝が不足をいふだけ相手に取っては猶更の満足だ、よほど喜んで歸つたぜ、あの五十圓を、どうするだらう」

「さアどうするか知りませんが、先方の事より妾の事も少しは考へて下さい、だしぬけの不意に無理な工面さゝれた其お金で、今日また妾が叱られるなんて、いくら蔭の價値にしろ、あんまり表向の役廻りが悪すぎますワ、全體あの巡查さんも巡查さんだよ、男らしくもない一旦、貫つて自分の手に取つたものを何だつて、わざわざ返しに来るんでしやう、よけいな事をする人だよ馬鹿馬鹿しい」

「さう、いふてやるない、地獄の釜の底でも物を掴んで取る世の中に、よけいな馬鹿馬鹿しい手廻りの掛るところが亦、相手の價値だ、ね、つまり相手の價値と汝の價値と出喰して鉢合せをしたんだよ、少々の痛いぐらゐ堪忍しろ、うき世の義理を買つた代償だ、はッはッはッ」

洋服を脱で和服を背に上せられし一作、お常の差出す兵兎帯を纏ひながら電話口へ立寄りて、關東銀行の木村周藏を呼出ぬ、

「は、稲川です、今朝あの番町へ出掛けて今、歸りましたが例の一件は御安心下さい、うまく説付けましたから、なか／＼わかつた人ですよ、實は初對面の覺悟で往つたところが案外、妙な事で、は、／＼くだらない事で、互ひに顔を知合つて居ましたよ、は、／＼もう大丈夫、まづこれで戦闘準備が整つた理由です、それに付て猶、も一度、急に御

稲田 一作

面會して置きたい事情がありますから今夜でも、は、は、なるほど、ぢやア築地の方へ伺ひまじやう、委細その上で」

電話口より出づるを待兼ねしお常、

「今夜、築地へ往らッしやるの、今朝の番町ッて、どういふ方」

「うるさいね、いちくまた詮議し出すよ」

「詮議ぢやアありませんが、これまで聞いた事のない番町ですからさ、お名前だけでも知ッて居ないと留守中、もし電話のかかつた時に」

「は、は、用意周到だね、阪崎といふ人だ、阪崎莊平、木村の爺さんよりも年の取た禿頭の阿爺だよ」

「は、は、御丁寧さま、さう委しくも聞て居ませんワ」

「いや、念には念を入れて置かないと、乃公のやうな男振は後日の間違が面倒だ、は、は、」

「あら、稲田さん、洋服で」

世間普通の目には一作と洋服、さらに何の關するところもなければ、お歌の目に映する一作と洋服は、ある意味に於て俄かに人間の改まりし心地、

「まア、どうなすツたの、だが不思議に似合ッてます事、妙なモンですれエ稲田さん」
一作、例の大胡座に腕を組での苦笑ひ、

「不思議に似合ッてるとは、けしからん挨拶だな、妙なモンですれエに至ッては殆ど聞給

稲田 一作

にならんぜ」

「ほ、だつて貴君が、さう急に洋服を召すと何だか變ですワ」

「あまり辻々しく馴れ過ぎて失禮も顧みず、お心易く見るからだ、しかし世の中は萬事がうだらうな、つまり最期が大事だ、どうも君の目には丸裸で夜具の化物が離れないからだよ、現に乃公の方でも君を今日の君として居ない、やはり舊の藝妓待遇にして、なり／＼祝儀を遣りたくなるかられエ、こりやアお互ひ様だ、はッはッはッ」

「稲田さん、冗談としては少々ばかり念が入り過ぎたやうですれ、なアに御遠慮に及びません、いたゞくものは今でも戴きますよ」

「や、しまつた、また思つた通りの本音を吐出した、いつも口と心が正直に出過ぎて困るよ、ちッとは違はないと世間が圓く渡れんれ、は、は、は、時に木村さん今夜、こゝへ来る筈

だらう、電話で約束して置たが、遅いね、乃公は急いで夕飯も食はずに來たぜ、いや、來ましたぜ」

お歌、じつと一作の顔を打守りぬ、

「稲田さん、毎度のこッてすから、いくら見まいと思つても妾、つい貴君の顔を見るやうになりますよ、まアよく穴だらけにならない事、よほど厚張ですれエ」

「いくら呆れて見られても、そりやア宜いがれ、今更ら後れ馳せに變な氣を出して見てくれるなよ、お氣の毒だが既に極つた嬢アのある身だ」

折しも門外に俤の降りし音、一作、そッと俄かに手を振りぬ、

「そら、來た、今のやうな事を顔色にも出しちやア不可ぜ」

お歌、一作の手を口惜氣に叩き退けて座を立ちながら振返りぬ、

「覚えて居らっしゃい、義理も人情も踏潰して妾を口説た事みんな言付けますよ」
 「南無三、飯が食へなくなつた、さア大變だ、は、は、は」
 いつもながら馬鹿と眞面目の境目、どこにあるやら更に分らぬ男なり、

眞面目に澄し込で思はせ振に嫌がるゝ氣取屋よりも、露骨に馬鹿げて喧嘩しながら憎まれぬ人とは、お歌の批評に上りし一作、君子めいた小人の多き今日あれば小人めいた君子的の男とは、聊か買収れど木村周藏の批評、よくても悪くても構はないとは世話女房お常が恍惚まじりの自慢、いよゝこれより罷り出る世間の公評は其實行と共に果して如何なる批評を産出すべきや、

お歌は階下に身を避けて、手が鳴れば直ぐに持出すべき酒肴の用意、二階の八疊には木村と一作が額を鳩めての密談、
 「先刻、ちよいと電話で申上げた通り番町の阪崎さんは御安心下さい、うまく説付けて來ましたから、もう大丈夫です、既に天下三分の計を以て對へば、いつ何時でも戦へます、のみならず歴々たる勝算がありますよ」
 「や、御苦勞でした、あれから阪崎が銀行へ遣つて來ましてね、いふ事が呵しい、随分これまで激しい火の粉の中も潜つて來たが、あの稲田といふ男には煙に巻かれて仕舞つたと、は、は、は、しかし後で君の出した二枚の數字標と意見書には本人、實際に參つたらしい、頗る感服して居ましたね、多年の間、人に接した経験上から考へたんでしやう、年の若い蕪落風の口の達者な人間に、どうして、かういふ緻密な數字的の畫策が出來たら

稲田 一作

うツて、稲田さん獨身でなくツて僥倖だよ、あの阪崎には今年二十五で、まだ何處からも貰人のない跛躰の娘があるんだ、阿爺これが生涯の苦になツてね、自分の見込さへありやア相手の如何に關せず二萬や三萬の金を背負はして遣りたいと、頼りに探し廻つて最中だ、はゝゝゝもし獨身なら否應なしの媒酌人が拙者の役目で、キツと君に白羽の矢が立つ場合だツたよ、危険危険、はゝゝゝ」

「いや、寧ろ殘念です、なアに跛躰も此方の取りやう次第だ、世間普通より隻脚の寸が短いといふから不可、つまり隻脚が延び過ぎてると思へば多少、堪忍が出来ますよ、はゝゝゝ現に保險會社も其通り一方で金がない足らない足らないと悪い方ばかり氣を揉で騒ぐから無効です、たゞ事業が膨脹した爲に舞臺が大き過ぎて今の資本ぢやア藝が出来ないといふ事にすれば、つまるところ積極と消極の議論だ、どうしても其間に捻直しの工合

があるモンですよ、はゝゝゝ時に木村さん、それに付て念のため是非お耳に入れて置かなければならない事があります、こりやア木村さん、最後に幕を切ツて落す秘密中の秘密で、いはゞ奥の院ですよ」

一作おもはず聲を潜めて膝を乗出せば、木村周藏いよく照返す禿頭を前に光らしぬ、

一作が木村周藏に對ふて、是が最後の奥の院ですと念を押せしは、果して如何なる秘密中の秘密なりしか、その秘密談の濟し後、俄かに用意の酒肴を呼で、お歌に笑はれ木村に笑はれながら、例に依て例の如き男、また牛飲馬食の厄介物となりぬ、

されど今夜の厄介物、案外に手數も掛らず、さツさと食ひ、さツさと飲で、凡そ一時間ばかりの後、はや既に座を起ちかけぬ、

「ぢやア木村さん、例の一件は宜しいですな、無論、なるべく避けて、わざゝそへ落

稲田 一作

し込むやうな事は仕ませんが、餘儀なき場合に對して致し方のない萬一の覺悟です、あれさへ御承知の上は、もう確實です、猶更ら手段の範圍が廣くなりますから、大に手足を伸して大に働きましたやう」

「承知しました、いかにも最後の決心で居れば大丈夫だ、はは、他の智恵は絞るほど減るが君の智恵は、ふしぎに出すほど増る、敵に取ては實に油断のならない怖ろしい人間だ」

「いや木村さん、そりやア間違ッて居ますよ、未だ表面の皮より御存じがない、全體の一作の智恵袋は空虚です、よし多少あるにしても種が黴いから、なるべく吝に構へて、なかなか容易に出しません、自分の生命を取られる死際でもなくては出ますまいよ、ところが此ごろの世間に才子才物といはるゝ奴は、どこで仕込だもンか、よほど有餘ると

見えて入らざる時にも絶えず惜氣なく、ふんだんに、ぶツ／＼と吹き出す、その吹出して洩れたのを内々そツと拾ひ込で置いて、かういふ時に出すんですよ、は、凡そ世の中に人の惜しがる金を取て縛られるほど馬鹿アない、この一作の如きは人が自慢に捨てる智恵を拾ふて貯蓄するんです、つまり智恵袋の中着切ですなア、はッはッはッ」

木村周藏、無言のまゝ禿頭を打振れば、お歌、目を剝出して小膝を進めぬ、

「かういふ怖い人ですもの、御用心の上にも御用心なさらないと此前途、何を企むか知れませんよ、私なかも外面は打解けたやうに心易く交際ッて居ますが、實は何時、どんな酷い目に逢はされるかと思ッて、少しも氣を許した事は御坐いませんの、そのくせ、ちよ／＼欺されて喰逃しられますからねエ、は、は、は」

「は、木村さん、貴君の面前でこそ、さも女らしく出来て居ますがね、陸で一作に對

稲田 一作

する無禮な極の段々を御覽に入りたい、をり／＼人間待遇をしてくれない時がありますよ、喰道にあらず、いまだ曾て一度も無事に喰はされた事がないから、中途で箸を捨て、遁出です、かう飲んで食った物が胸にも悶へず満足に胃の腑へ落付くのは木村さん全く貴君の面前ばかりです、は／＼どりや睨まれないうちに御免を蒙らう、やはり女は生涯を連添ふ奴に限りませぬア、ちよいと電話をかけて歸らう」

市街道路、家屋家庭、その他の風俗習慣、に一致の改革せられざる今日、いまだ日本人としての洋服は遺憾なき常住不滅の衣類にあらず、只これ禮服と仕事著なりとは、兼てより一作の口にするところ、加之も日本人として戦士の武裝に於けるが如き洋服を著ながら

稲田 一作

ごろ／＼疊の上に寝轉ぶ奴は、世の中に生きて居ても用のない奴と笑ひぬ、その一作が俄かに新調の洋服を纏ひし以來、果して平生の言葉に違はず、ぶツても叩いても動かぬかと思ひし此愈情生、急に身を躍らして電光石火の働き振、殆ど家にある事なし、久しく或意味に於ての陣中に身を横へし一作が、いはゆる武裝してより一月あまりの後、わけて今日は朝の五時前に飛出せしが、お常たゞ一人、後れて投込みしその日の新聞を手に取上げながら、何心なく見る雜報欄内に壽福生命保險會社の總會紛亂といふ文字、ふと目に入りぬ、

あの無口より委細は聞かれど、絶えず木村との電話も此會社に就ての事、第一また此ごろ急に良人の忙がしくなりしも此會社に就ての事、お常の身として、いかで見遁すべき、

壽福生命保險會社の紛亂

近來諸會社の總會時期に際して昨年以來引續きし經濟界不振のため何れの會社も多少の打撃を蒙り裏面の内情に往々面白からぬ噂ありしが壽福生命の總會は實に意外の觀を呈せり元來該會社は保險業者中比較的世間の信用を鞏固に維持し來りしのみならず不景氣の頂上に達せる今期の如きすら現に一割五分の利益配當をせしに拘はらず昨日の總會最中株主の一人稲田某が突然非常なる憤激の態度を以て重役に向ひ其裏面の秘密を無遠慮に發いて會社内情の大缺陷を遺憾なく曝露せしため重役は俄かの狼狽に色を失ひ株主は始ての驚きに總立となりて場内一時の紛亂なかゝの騷動を惹起せしが竟に總會中止延期の已むなきに終れり由來斯の如き云々のなかりし會社だけに猶更ら以て今後の雲行は見物なるべし、

お常、はッと思はず居座を直して、いき／＼と張切る目元を的もない庭の檜に注ぎながら

またもや再び其新聞を取上げて見直しぬ、

お常、幾度も新聞を取上げて讀直しながら、頻りに眉を蹙め小首を傾けぬ、

今この家も電話も、何の不自由なき日々の生活費も、その他の世帯一切あの木村より運ばれて、つまり實は此保險會社の内情に就ての事、固より人しれぬ秘密のあればこそ、さるを晴がましき總會の眞ツ最中、その重役に對ふて非常の騷動を惹起せし不意討の發頭人は、いかにしても不思議の至極、あまりの案外、もしや他に同姓の人ありてか但しは新聞の誤記かと、傍目も觸らず羨俯いて、じツと稲田某の三字を打守りながら、一作といはず某とせしだけが心の力草、よもや恩を仇に返す良人でなし、あはれ他人であれかしと祈りぬ、

その外に三四種の新聞を取上げて、いち／＼目を通せど、やはり一作といふ名はなく、た

稲田 一作

「稲田某といふ三字に、お常の半信半疑、ますます胸を痛めて打沈みしが、門の扉の開く音さへ耳には入らず、近く入来りし人の靴音に始めて心付きながら、なほ立出づる氣もなく、手を鳴して下女を呼べど、いづれへ行きしか生憎その下女の影さへなし、

「たのむ、たのもう」

頻りに呼ぶ聲、お常、やう／＼立出で、何心なく見るや否、

「おやッ」

睡れる全身を電氣に打たれしが如く、はッと驚いて遁げも得せず、其まゝ其處に座して顔色を變へしも道理、金縁の目鏡越に一種異様の眼光を放ちし色白の八字髭は、丸三年の義理を振捨て、今も寢覺の心に疚しき例の辯護士田中時雄、流石に再び仰いで見られぬ頭上より打振ふ男の聲、

稲田 一作

「稲田、稲田 一作氏、居られますか、奥さん、お取次、ね、願ひます」

「はい、只今、留守で御座います」

「留守、では奥さん、貴女まで申入れて置きましたやう、昨日の總會、壽福生命のこつてす、それに就て、或一部の株主團體から委任された、田中といふ、辯護士が、相當の資格を保持して御内談に出ました、確と間違なく、傳へて貰ひたい、わ、忘れては、いけませんよ、覺えて居て下さい、田中、時雄といふものです、しかし結構な、閑靜な、きゝ氣樂らしい、お住居ですなア、失禮ですが、奥さん、貴女の、お名前は、何と仰しやる、なり／＼、これから伺はなければ、ならない關係を生じましたから」

案外の新聞に驚き、おもはぬ人に驚かされて、重れぐの胸を痛めしお常、猶更ら心淋しき只一人、今かくと待てども生憎今日にかぎりて遅く、夜に入りし九時過、やうく歸り來りし一作の顔を見るや否、はや目に持つ涙、

「大變、今日は遅かつたんですね」

「一日の奮闘に他の數倍を馳廻りながら、さらに疲れし顔色もなき一作、どかりと大胡座のまゝ微笑を浮べぬ、

「なアに汝、これで今日は仕事の割合に早いんだ、よほど巧く切抜て來たのさ、しかし面白い、世の中ア面白いね、いはゆる一夫その要に當れば萬夫その喰を破る能はずだ、はゝゝゝ何故この面白い世の中を厭ふて自殺する奴があるだらう、つまり生きて居ても用のない人間が自然の約束で淘汰せらるゝ理由かね、なア常、お互ひに出来るだけ養生し

て、なるべく長生しやうぜ、はッはッはッ」

お常、ますく打沈みし風情、

「逆も妾は、さう長生しられないやうですワ、どうせ良人より早いだらうと思つて居ますよ、苦勞性で、つまらない心配が多いから」

「馬鹿アいふな、病死老死その他の不可抗力に於ける外、無事に生きてる奴が心配ぐらゐに生命の勘定しられて堪るか、はゝゝゝ」

「だッて、今日のやうな事が、ありますもの」

「今日、どういふ事があつたい」

「れエ良人、今朝の新聞を良人、どッかで御覽なすツて」

「や、あれかい、あの新聞一件かい、はゝゝゝ安心しろ、ありやアね外科療治で、捨てゝ

稲田 一作

置けば全身に腐蝕する腫物を切開したんだよ、一時的の張膏藥ぢやア逆も無効だから寧ろ今のうち切ッて取たんだ、汝なんか心配するこッちやアない」

「そりやア、それとしても妾、まだ外に妾、どう考へても心配でならない事があるんですよ」

「何だい、うるさいなア」

「今日、田中さんがね、不意に來たんですよ」

「田中、あの田中か、例の田中か」

「さうですよ、妾、まア、驚愕して仕舞ッて、逃げるには逃げられず、どうしやうかと全然、今日といふ今日こそ妾、全く狼狽ましたよ、加之も良人、いやに皮肉な人ですからね、わざと四角張ッて妾に、奥さん奥さん」

稲田 一作

「奥さんも宜いが全體、何の用で來たんだい、まさか汝とは知らずに來たんだらう」

「無論、さうですとも、いくら田中さんでも妾と知ッちやア、男として白晝、來られませんよ、つまり稲田一作といふ四字それも良人とは知らないで、たゞ保險會社に就て」

「は、ア、さうかい、や、それなら鬼が來ても蛇が來ても宜い、大丈夫だ、もし汝の身に關して變な工合に來られると少々、まゐるかられ、わざと好き好んで乃公が出來したでもないが事實、かうなッた以上、ある程度まで彼に對して弱い一作だ、また汝だッて正當の妻ぢやアなし、悔ゆれば改めて差支ない、妾の身體に暇を取ッて來ても、やはり相手に對して弱いところがあるよ、して見ると乃公と汝は互ひに不思議の縁でかうなッたもの、さて人間の生涯は謹むべきものだなア」

他人の狼狽へ慌て、驚くべき事には、石地藏の頭を蚊が刺すほどにも感ぜざる一作ながら、

流石に腕を組で目を閉づれば、お常なほさら我身の辛さ苦しき、おもはず肩を繋めて小膝を進めぬ、

「れえ良人、まアどうしたら、宜いでしやう」

「わざわざどうするにも及ばない、かういふ成行でかうなつた以上、たゞ平気で居るが宜いさ、乃公の考へてるのは外のこつたよ」

「だつて、ちよい／＼意地になつて来られると、困りますかられえ、第一また口でこそ立派に男らしく、わかつたやうで實は男らしくない、野暮に執念深い没理漢ですから、わるく意地にならないとも限らない人ですよ、なアに妾は元來、平氣ですワ、黙つて逃げたでもなし、世話になつてる時、顔を潰したでもなし、先方では無理往生か知らないが此方は明白に暇を取て何一個、身にも付けず、世間普通の妾氣質では素馬鹿に見えるほ

ど慾を放れて出て来た身體ですもの、どんな事があつても澄して居れますがね、もし、萬一もし良人に對して妙な工合に、加之も良人が差掛つてる保險會社の事で来たといふ相手ですから」

「は、／＼その段は安心しろ、いかな敵でも騒げば騒ぐほど乃公の藥籠中だよ、そりやア宜いがね、ちよいと考へ込んだのは今いふ通り外のこつた、しかし其事も考へた結果、やはり何でもない理由さ、いくら覺悟して居ても人間といふ奴、つまらない事で、をりをり弱くなるもんだなア」

「あら良人、あゝいふ人が来て妾の身にケチの付た、こんな運の悪い時に變な事を考へられては、いやですよ、どうせ良人、元は藝妓で、中途は人の妾になつた女を承知の上でかうして置いて下さるんではやう、良人に取て迷惑な悪縁といふ事は最初から知れきつて

稲田 一作

るぢやアありませんか」

「おい／＼、おい、また愚痴ッほく強れ出すよ、うるさい女だな、實ア乃公が相手の身に
なツて、どんなもんか、考へたこつたよ」

「おや、良人が、相手の身になツて、何故です」

「何故ツて、さうだらう、よく考へて見る、男が美しくツて金があツてさ、どこへ押出して
も女に不自由のないものが丸三年も氣に入ツて世話をした妾に不意遁逃をしられて」

「あら、卑怯に逃げるもんですか、大びらに出たんですよ」

「は／＼、まアさ、逃げたにしろ出たにしろ、兎も角も相手の意志に反して身を退たんだ
らう、その退た汝が、乃公のやうな男を亭主にして、嫡ア然たるところへ来た心持は、
どうだらうかと思ツてさ」

稲田 一作

「よけいな事を思はなくツても宜う御坐います、馬鹿馬鹿しい、妾は本氣に心配して
ですよ」

「だがね人情、さう心持の善くないもんだらうよ、おまけに乃公の面を見れば、汝が無理
に出たといふ三日目に例の日比谷公園で一演劇あつた野郎だからね、猶更ら癪に觸るよ、
腹ア立つぜ」

「立ツても寝ても構ひませんよ、今度もし来れば妾、自棄になツて喧嘩腰ですワ」

「さア、その喧嘩になツた時、この乃公は全體、どういふ工合に挨拶すべきもんだらう」

稲田 一作、いづれの時、いづれの場合、どれほどの不利益ありとも、會はで叶はぬ以上、

稲田一作

その不利益のため眼前の難を避けて遁出す男にあらず、この無精者かと思ひの外、用さへあれば手紙で済む事も直接その身を運び込で一刀兩断の男、もし一作に借金ありとせば、居ながら催促せらるゝよりも取りに来る奴を間断なく追廻して主客轉倒、をりく留守を使はるゝ事あるべし、

この一作が例の田中時雄に對して、いかでか二度と再び我家に足を踏入れさすべき、電話帳を見れば互ひに顔を合さぬ便利ありながら、その翌朝まだ世間の起出でぬ頃、わざと不在の事務所を叩いて一片の名刺を抛込み置き、直ちに神田の鈴木町なる本宅の寢込を襲ひぬ、

逆寄に押寄せられし田中時雄、ぐツと癪に觸れど、我身に面白からぬ相手だけに猶更ら以て支關拂ひも得せず、思はず舌鼓を打鳴しながら、しぶく書生に命じて應接所へ案内さ

せぬ、

いづれ心持よく出て來ぬ奴、どうせ暫時は待たさるゝ覺悟、果して一時間の餘も捨置かれし後、やうく入來る田中は既に洋服、此ま、他出の約束ありといふ長座無用の態度を示されて、一作ますく慇懃の挨拶振、

「早朝から伺ひまして、甚だ失禮ですが稲田一作、私です、わざわざ昨日お越し下さいましたに生憎く不在中で、恐れ入りました」

さらぬも胸に炎焔の田中時雄、金縁の目鏡越に眼を据て見れば、保險會社の事件に就て稲田一作といふ名こそ三四日以来、始めて耳に聞けども現在その面は今年の春、お常が逃出せし三日目の日比谷公園にて我に楯を突きし男、あまりの意外と、重れ重れの案外に、あツと呆れし顔色、一作また殊更に驚いたる體、

稲田一作

稲田 一作

「や、これは、ふん、貴君ですか、こりやア何と御挨拶して宜いか、實に困りましたなア、たゞ恐縮だ、もはや事ここに至って過去の申譯する必要はない、第一また聞かると、貴君でもなしさ、強て聞濟を願ふべき一作でもありませんが、田中さん、何だか變な工合で妙なもんですれエ、貴君の妾が今、私の妻で、その貴君と私が保險會社の事で、や、これは驚いた、寧ろ奇だ、しかし妾なるものは、ねエ田中さん、全體この妾といふものは」

次第次第に聲を張上げて、妾々と叫び出す一作の破鐘聲、こゝは本宅の妻子ある田中の驚愕、おもしろ手を振出しぬ、

「君、君、も少し聲を低く」

「はッはッはッ、や、うツかりしました、なるほど御本宅ですなア」

稲田 一作

さらぬも狭き應接所を漏るゝ元來の大聲、わざと張上げて頻りに妾々と叫び出せば、おもしろ面を皺めて手を振る田中時雄、もはや與し易しと見て取る一作、俄かの小聲、實は敵の機先を制し荒膽を奪ふて咽喉首を掴みしが如し、

「や、御本宅と承知して居ながら、つい、うツかりと鬺音的の地聲が出て恐れ入るしかし、田中さん、お互ひに人間は感情動物です、口にこそ出さないが心に面白からん事があつちやア勢ひ、要件の談話にも意志の疎通を缺きますから、いッそ露骨に正直に男らしく潔よく雙方で思ッてるだけの事を吐て仕舞ひまじやう、つまり女といふものは實に油断のならないもんですなア、決して女そのものゝ恐ろしい理由でない、この女の薄弱に乗じて脆く變じ易い運命を轉がす悪魔の翻弄が怖ろしい、既に事實は現在の貴君と私の間に於ける彼女が即ち、それですよ、元來、婦人としての生涯に早く一大缺點を帯びた藝

妓ですから、固より淑徳圓滿の完全を望まれません、貴君より見れば丸三年も何の不
 自由なき世話を受けながら、終りに善くせずして去った女だ、また私より見れば今更
 ら愚癡のやうですが、天下に女の数は多く、我いまだ妻を急がざるに何の悪縁ぞや、さの
 み有難くもない他人の持飽た、お古を頂戴したんですから、は、は、は、加之も田中
 さん、貴君は正當の妻として、殆ど或意味に於ける或程度を限って、いはば金錢
 上に繋いで来た女の去った以上、いづれの何物に行くとも走るとも御異存のあるべき筈
 はないでしやう、一作また前身は何物の妾にせよ玩弄物にせよ縁あつて今日の我妻とし
 た以上、生涯あのみ、無事に持通す覚悟です、去ったものに未練なく異存なく、うけた
 ものに遠慮なく忌憚なければ、彼女に就ての貴君と私とは今日こゝに改めて野暮臭く何
 の關するところもない、たゞ一個の女が藝妓がら妾となり妾から妻となつた順序だけを

比較的、世間の人よりは近く深く知つてるといふのみのこつて、さうぢやありません、
 田中さん、ところで男と男は所謂當つて砕けるといふ世諺の如く雙方これで濟み
 ますがね、さて女といふもの、度し難いには實際、困りましたよ、昨日、あまりの不意
 に驚いた結果、この御本宅へ自分が出るなかと騒ぎ出します、つまり貴君の奥さんに
 逢つて、以前お世話になつた事から今日の身分を白状する決心でしやう、は、は、は、馬鹿
 の一言に叱り飛ばして置きました、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
 わざと保險會社の事に就ては一言も出さず、ますます敵の利器を奪ふて敵の急所に研込め
 ば、いよく顔色を失ひし田中の窮狀、動もすれば狼狽して逆倒に謝罪證文の一札も出し、
 れまじき體なり、

敵としては最も恐るべき女の怨恨を含みし敵の田中時雄に對ふて、ぐうの音も出させず、逆寄せに押寄せて饒舌りぬきし一作、わざと保險會社の要件を忘れたる如く、其まゝ飄然と立去りて番町の坂崎老人を訪ひ、何事かを打合せし後、また關東銀行に木村周藏を訪ふて暫しの密談、折しも幸ひの時刻と方角、晝飯を築地に極込で例の馬鹿口を叩きながら便々と腹を膨らせ、もはや今日の用なき身となれば電車にも乗らず猶更ら辻に車夫の聲も願みず、ぶらぶらと歩みて午後の三時過ぎ、谷中の我家へ歸り來りぬ、今朝は先登第一まづ田中の寢込へ研入るといふ、出がけの言葉に一入の氣を揉みながら、今かくと待受けしお常、良人の顔を見るや否、

「どうでした良人、どういふ工合でしたの、もし妙な張合にならなければ宜いと思つて、さんざ獨りで心配して居りましたよ、どんな様子」
 「なアに、何でもなないよ、はゝゝゝしかし先方ぢやア、聊か面くらつて驚いたらしいね、あまり廣くもない家で妻子のある本宅だからね、わざと乃公が大きな地聲を出して、妾々と叫ぶ毎に先生、頗る恐縮の體だつたよ、思はず知らず手を振つた工合が呵しかつたね、戦々兢々びくびくして居たぜ、はッはッはッ、だが考へて見ると氣の毒だ、乃公も汝のため、心にもない毒を吐いて、いやな藝をする人間になつたよ」
 「おや、妾のために酷い事、さう妾のためばかりでは、ありますまい」
 「はゝゝゝぢやア大まけに負けて、二割ぐらゐ引いて置かう」
 「二割ぐらゐ不承知です、半分づゝ背負つて、五分五分ですよ」

「かう揃ッて此方が暢氣に出来てるだけ、未練のある先方ぢやア猶更ら面白くならうよ
つくづくと今日も見たがね、なるほど好男子だ、よほど乃公と段が違ッてるわい、あれ
で金があッて世間に持てる職業だもの、どうしても女に逃出される筈がない、ないとす
れば汝、いよく諦められまい、人一倍の癪に觸ッて腹の立つのア無理もないぜ、おま
けに寢込を逆寄しられて、皮肉と無遠慮のありッたけ、づうづくしい此野郎に浴せられ
たんだからねエ、たまらないよ、いかにも同情に堪へない、是非とも汝、先方の差支に
ならない時刻と場合を考へた上、あらためて謝罪に行け、あまり冥加が宜しくない、男
は男で餘儀なく退くに退かれない事もあるが、女ア女らしく、どこまでも弱く出る方が
女の價値だ、但し一人で夜は不可よ、立會人兼監督に筑地を添へるからね、しかし彼女
も油断がならない、はッはッはッ」

近來は朝早く夜遅く、殆ど一月あまりを門外の俗塵中に馳廻りし一作、たま／＼今日の小
半日を奇業がくれの我家にありて、はや庭前の垣根に夕陽の渡る頃となれば、この大膽な
る疎腕の策士も何の罪なく業なく、面に似合はぬ稚氣を帯びながら世評女房お常に對ふて
夕飯を急ぐ體小兒の如し、

「おい、おい／＼、どうだよ、まだ夕飯は出来ないのか、遅いこッたなア、ごと／＼と鼠
のやうに音ばかりさして全體まア臺所で何をしてるんだい、お客があるぢやアなし、且
那樣の一人前で宜いぜ」

お常は眉に小皺を寄せながら、いき／＼と張切る目元、椽端より射し込む夕日に猶更ら汚

て、心の底をむに餘る風情、生きた浮世繪なり、

「やかましい事、今、すぐですよ、別段、これから何處へも出る御用はないでしやう」

「用は無くツても腹ア減るよ」

「ほ、ほ、かわい氣のない、行儀の悪い蒼蠅い千松ですれエ、さう寢轉ンで居れば大丈夫その上に倒れる氣遣はないンですから、なるべく減らして、おとなしく堪忍なさい、此ごろは毎日毎日出歩いて、たまですもの、幸ひ妾が二三日前に買ツて来た料理法の本で出来さうな御馳走を五種ほど悉皆、してあげますから」

「や、ちよいと待ツてくれ、女學校の科目なら宜いが實地の世帯だ、折角の美品い材料を此ごろ流行る書物の料理法で焼たり煮たり仕られちやア困るよ、天下の料理も食物の料理も同じニツたぜ、多年の經驗上いふにいはれない自然の手に入ツた呼吸の味が出るン

だ、火加減や水加減を時計と寒暖計で量るやうな数字的料理が食へるかい、面倒だ、あのだけの種類を一鍋に叩き込で味噌と醤油と砂糖と味淋を持つて来い、おでん燗酒の鹽食に如かず、めちやくの煮込で食はう」

「あら、まア、何といふ情のない下司張ツた良人でしやうねエ、今日こそと思ツて妾が生懸命、さんざこれほど骨を折ツてるに、おでん燗酒なら往來の家臺店にもありますよ、兎も角も出来るまで神妙に待ツて居らツしやい」

「ぢやアね、かうしてくれ、そんな書物料理を激しく一時に眼前へ並べられちやア閉口するから、そろ／＼無事に食へさうな出来た分から一品づゝ運ンで貰はう、無論、講釋は食ツた後のニツたよ、つまり飢た胃の腑へ欺して押込んだからね」

「いッそ、もう、お茶漬にして下さい、出来た食物は犬にでも道りましやう、犬は尾を振

ツてくれますよ」

「は、は、は、しかし汝の骨折に對して、それぢやア濟まない」

「よろしい、かまひません」

この馬鹿げたる夫婦の間には、家庭學の必要もなし、

近ごろ新聞廣告で賣出すやうな書物料理が食へるものかと、口を極めて吐出す如く罵倒しながら、儲いよく箸を取る段となれば案外に文句なしの一作、むしやくと脳目も開らず食ひ込む體を、お常、その傍より打守りて呆れ返りぬ、

「いくら堪忍するにしても、あれほど冷罵した食物を、よくまア良人、さう無事に押しもせず胃袋へ納まりますれエ、心配だ事、あまり無理に堪忍なさると毒ですよ」

「いや、腹の減つた時は少々の毒に代へられない、まさか毒に中つて死ぬやうな事アない

らう、は、は、は、この酸にした鯖の鹽加減が、ちよいと乙だよ、こりやア汝、これツきりかれ、まだあるかい」

「どうだか、知りません」

「さう怒るない、他人ぢやアなし夫婦の間だ、いち／＼さう執念深く復讐的の意地を持つちやア困るよ、あツさりしてくれ」

「他人でない夫婦の間ですから良人、これで濟むんですよ、もし他人なら、お金で勘定する料理屋だつて黙ツちやア居ますまいよ、喫べた上で、いくら不足を聞ても構ひませんが、さんざ妾が一生懸命になつて、まだ出来もしない前から何だの、いや、かたのと、全體まア良人、どツちが、あツさりすれば宜いんです」

「は、は、は、なるほど、さう押されて見ると、聊か乃公の旗色が悪くなつたやうだね、しか

「面白いな、實に圓滿だ、おもしろい」

「おや、何が面白いんです」

「何がって、さうぢやアないかい、凡て世の中の人生といふものはね、わざと改つた四角四面の中央に誠意も趣味もない、つまらない不用意な圓い邊に人間の血が暖かく包まれてるんだよ、現在、この乃公も門外へ踏出して世間の奴等に對する時は一言一句、なかく油断は仕ないぜ、寧ろ逆に組付て敵の頸を刺す男だ、其奴が汝、かう馬鹿げて安心して打解けて、智恵も工夫もなく小兒のやうに悪戯ける工合、少しも嫌な人爲的作用がない、いかにも生れたまゝの天真爛漫、可愛いぢやアないかい」

「ほんゝどこがア、かわいゝんでしやう、萬事に良人ア、あまり生れたまゝ過ぎますよ」

「だが汝、よく考へて見る、黄金にも地位にも教育にも有餘る立派な紳士で居ながら、生涯の苦樂を伴ふべく誓つた家庭に血を分けた骨肉の夫婦シ子が睨み合ふてさ、敵地にあるが如く互ひに用心堅固の不愉快な世を送る奴が多いぜ、實に人生の悲痛慘澹だれ、それから考へると極樂だ、極樂ついでに今の歸を、も一皿、ほしいな、あるだらう、なくとも汝、あるにしる、そこが夫婦の情だ、少しぐらゐ手間が取れても堪忍するよ」

「全體、この人間といふものは生涯、自分の身體を絶えず責め抜て仇敵のやうに取扱へるもンぢやアなし、また獄屋へ叩き込まれた囚人のやうな氣で居れるもンぢやアない、大小輕重内外表裏、いづれか調子外れの馬鹿げた小兒らしい點がなくて叶はない筈だ、して

「私、稲田です、一昨朝は突然お邪魔いたしましたして、恐れ入りました、は、は、いや、なアに此方こそ、汗顔の至極です、兎角うき世の事は總て豫想外ですよ、かういふ場合は田中さん、つまり貴君の雅量に訴へるより外ありません、萬事一切、どうか御一笑に付して戴きたい、過去は過去として、お互ひに實は雙方、あまり光榮なこつてもありませんから、は、は、時に田中さん、あの時は、わざと差控へて居つた事を今日、あらためて伺ひますが、壽福生命の件に付て何か、一部の株主團體から御依頼を受けられたさうですが、この稲田への御交渉は全體、どういふ次第です、お差支のないかぎり失禮ですが電話で簡単に要領だけ願へますまいか、は、は、なるほど、いかにも、は、ア、さういふ御決心ですか、や、紳士の態度として實に感佩いたします、では、いよく御謝絶なすつたんです、さう承はつた以上、もはや此方からも内容を伺ひません、ちやア

これで御免を蒙ります、いづれ其うち、さやうなら」

田中といふ聲に驚いて、お常おもはず背後に立てば、電話を切りし一作、靜かに振り返りて満面の微笑、

「どうだい、久しぶりで汝、何か愛嬌のある談話でも仕て見ないかね」

「いやですよ、つまらない、しかし良人、大變に言葉が丁寧でしたれエ」

「風もあり雨もあり日和もあるよ、かういふ工合に持つて行くから、相手が參るんだ、乃公のために善いか悪いか知らないが現に一部の株主團體から頼まれたことを、急に謝絶したさうだ、つまり男を賣つた量見だれ、まづこれで面倒な奴が一人、自滅したわい、は、は、は、は、」

稲田 一作の壽福生命保險會社に對する外科療治の第一著は、突如として平地に波瀾を起せしが如きも、實は最後の結局を打算せし計畫、いづれ外面に現はるべき祕密の内情を自然の運命に先んじて我より早めしのみ事、まづ總會の席上に根本的の覆らざる限り或程度まで其缺陷を發いて、直接の利害關係さらぬも神經過敏なる株主の眞上に俄かの驚慌を浴せかけ、また一面には差支のない限り重役の責任問題を提さげて致命傷を避けし攻撃の矢を放ち、殆ど警官を煩はさむばかりの騒動に、其日總會を其まゝの中止に葬り去りしが首尾よく第一著的の中、いよいよこれより物凄い怪腕を振ふて第二の演舞場に入りぬ、第二の活動は既に第一著の成功を幸ひ、すかす引續いて盛に都下の通信社を利用し巧み

に新聞政略を行ひ、そろ／＼主務省の注意を惹起すと共に激しく世間の批評を興奮させ株主の氣を腐らして、竟に五十圓全部拂ひ込の株を市場の恐怖心より十七八圓まで一直線の棒下げに叩き落しぬ、

第二の外科療治たる株券を引落せし後、わざと責を帯びて社長の木村周藏に辭職させ、大株主の筆頭たる阪崎莊平をして兼ての内約履行、固より半額の損失を承知の價格に賣り飛ばさせ、いよいよ風聞に違はぬ會社の命脈を危急存亡の間一髪に置きし時は、甘きに乗へる蟻蟻の如き奴原いづれも恐れ去りて、もはや既に第三の策は自由自在なり、

第三の策は株主の類々たる嫌氣抛に従ふて正に來るべき被保險者の周章狼狽つゞいて俄かに主務省の監督嚴重、今更ら慌てゝ急に保險課長の調査となりしが、實は待受けましたといはぬばかりに禍を轉じて福とすべき苦心慘愴の計畫、ますます悲觀の聲を大にして出來

得るかぎり内々の用意をせしため、監督嚴重の下に調査綿密の結果は案外の反対を示して
 缺損は缺損ながら、積立金の代用に何の深き故障もなく、つまり放資の固定に窮しながら
 或時期を経過せば大體の上に何の變化もなく、十中の八九までは手に取る如き世間の風評
 いづれ必ず軽くとも保険募集の禁止命令を蒙るべしと思ひしに、思ひの外たゞ會社の不取
 締と不始末を好意的に叱責せられしのみ、當分の利益配當さへなくば確的に立行くべきも
 のと定まりぬ、

この第二第三の間より産出せし第四第五の策に於ける一作の機敏さは、實に物凄く人の弱
 點に斬込み利己心を釣上げて、一方に激烈なる解散説を唱へ、また一方に株式を變じて相
 互會社とすべき議論を吹立て、殆ど内外を一時の煙に巻いて振廻せしが、儲その裏面には一
 定の方針を極めて著々たる歩武を進め、加之も周到緻密なる數字的の結果に運び込みし手

腕を實地の上に見たる木村周藏と阪崎莊平の二人、おもはず身を反して目を剥出しながら
 驚きぬ、

詮じ來れば一作のため世間も株主も被保險者も主査省も、まんまと手盛の一ばい喰されて
 一時は五十圓の額面を十三四圓まで切込みし株券が其反動力に跳返して三十五六圓に立戻
 りし時、いつの間にかやゝ過半數を買占められてかゝる事に油断なき火事場盜賊の素早い奴
 も鼻毛を讀まれし體、暫らく事業の飛躍範圍は縮まれど、寧ろ灰汁ぬけせし會社の保護は
 監督廳に裏書せられしが如し、

所謂一旦これを死地に陥れて、また再び活地に救ひ上げしもの、一作その間に費せし日
 數は僅かに前後四個月、迅雷の耳を掩ふに違なき態度を以て内外周圍に思案の隙間も與へ
 す、この激烈なる傍ら世話女房お常に戯れて、あれほど暢氣な馬鹿口を叩きしかと思へば

なるほど智恵も智恵ながら胴骨よりも膽魂の太い奴なり、

悪戦苦闘の境、思ふまゝの大勝は得ざれど、まづ死地を轉じて一方の活路を開きし軍師、
に前途の大勢を按じながら、暫く休養の状なり、

壽福生命の社長は兎も角、専務取締役の地位は確かに掌中へ落來りし一作、わざと殊更に逼
けて見向きもせず、一時の方便に我名義となりしもの前後合して六百の株も、其まゝ強ひ
て木村と阪崎の二人に返しながら、殆ど自分の功を忘れたるが如き古英雄の態度、さり
て餘りに不思議なり、實は此奴まだ外に人しれぬ恐ろしき不敵の大敵ありて、その胸中に
深く包蔵せるがためならざるか、

わけて今年に乾蒸の打續きし七月中旬、薄き手拭地の浴衣を纏ひながら、庭前の葉蔭に對
ひし椽端近く大胡座、絶えず團扇の音させて、お常を振返る面相、どうしても其道の老功
が匙を投げし百萬の保險會社を軽く引受け、これを手鞠のやうに取て來た男と思へず、

「ねエ、おい馬鹿に今日は熱いぢやアないか、身體の弱い奴は温泉へでも逃出す筈だ」

「温泉といへば良人、木村さんが頼りに勤めて居らっしゃいましたよ、今年の夏は箱根が
伊香保へでも出掛けたら宜からうッて、もう良人、するだけの仕事は充分なすッたし、
別段その費用に心配はなし、いくら達者でも、やはり平生の保養が専一ですよ」

「はゝゝ、此ごろの避暑や温泉は寧ろ癩癩の蟲を起して苦痛に行くやうなもんだぜ、考へ
て見る、金庫の中から涌て出た黄金蟲のやうな奴等が贅澤の競争場だ、わづか今度の年
み金に貰つた五千圓ぐらゐで、どうなるい、それよりヤア、かうして隣り座敷に他人の

居らない茅屋で當分の天下泰平が氣樂だ、却つて身の保養になるよ、は、は、は、」

「なるほど、さう思へば眞實、さうですれエ、しかし良人、あの五千圓で、これから前途どうなさる御決心、よけいな事を聞くやうですが」

「いや、よけいなことしてない、女の汝としては氣になるのも當然だよ、だがれ乃公には更に何の思慮もない、ただ片ツ端から入るだけづゝ引出して無事に食ッて仕舞へば、まアそれで宜からうと思ッてる、高が五千圓の端金だ、見てるうちに消えて無くなるよ」

「あら、さう良人、たゞ夫婦で理由もなく喫べて仕舞ッちやア勿體ない事、あまり良人ア何事にも大き過ぎて困りますよ」

「ところが案外、實は汝よりも吾に小さく勘定高い邊もあるぜ、あの五千圓、あれを乃公が仕事する上で見るから端金だ、また消えて無くなるまで食盡す間には一方で移くと

も必ず十倍ぐらゐの金を産出す方法は坐ッて居て考へるよ、おい常、汝に見せるものがある、今年こゝへ家を持つて以來、出る毎に二三十錢づゝ費ッて歸ッたらう、現に築地と汝に不審を打たれた事があつた、あの錢は乞食に呉れたでもない泥溝へ捨てたでもない、いち／＼ありやア郵便貯金にしてあるんだよ、右の手で五千圓を屁とも思はぬ一作また左の手では白銅一枚も廉末に扱はない、生涯に對する或意味を以て百萬の保險會社を自由に轉がした最中でも、やはり出れば日に五十錢以下の錢を絶えず貯蓄したぜ」

お常、おもはず良人の顔を打守りて、何となく物凄う恐ろしくなりぬ、

五千圓の金を妻の名義に關東銀行へ預けて、必要に應じ入るだけづゝ何事もせず喰ひ缺く

一方には、案外また出る毎に二三十錢づつ、自己の名義にて郵便貯金を怠らぬといふ、不思議の事實を聞くや否、さらぬも保険会社の怪腕に舌を巻いて驚きし木村周藏と阪崎莊平、俥を聯れて訪ひ來り容を改めて其意志を問へば、一作、冷かに笑ふて答へぬ、

「なアに別段、わざわざ貴老方の駕を枉げられるほど變つた新しい、これといふ理想も主義も思慮も糸瓜もありませんよ、いはゆる零碎を積で庫を建てる目的もなし、また不時の災難に備へて萬一の用意するでもなし、曾て其日の食ふに困つた事が身に染みて蟻の餌を運ぶでもなし、はゞ、たゞ出る毎に有つても無くても差支のない範圍内、いはゞ何等かに對する冥加のため、わざとでなく殆ど無意味の習慣的に投込むんですよ、つまり神信心の凡俗に於ける賽銭と同じ工合です、直接さらに何の反照も靈現もない空漠たるところに一種いはれぬ妙な感じがあるからです、稲田一作も前途あの貯金を引出して役に立てるやうぢやア心細い、はッはッはッ」

既に心酔せる二人さらに、不得要領なれど、ますくその漠たるところに感じ入つて首を傾け、互ひに内々の下相談ありしものが、おの／＼五萬圓づつ合して十萬圓の出資、いかなる面白き方面に注がる、か我々一切の干渉を絶ちて、君の自由に任して見たしといへば、一作また手を軽く無難作に答へぬ、

「思召は有難う御座います、過日、うけた五千圓を身體の肥料として、當分まア此まも休養いたしましたしやう、實は差當つて只今、さう急に十萬の資金を注入して戴くべき目的もありませんから第一また露骨に申せば元來の放逸性、やはり自分の赤手空拳で時節到來の働き場所を見付け次第、氣兼ねく思ふ存分に跳れたいと考へます、つまるところ一作の如き奴は當世流の生れ損ひで、金よりも名よりも地位境遇よりも、人生たゞ快心的

の仕事に對つて面白く華々しく遣つて見たいといふ、罪のない人間に出來て居りますよ、加之も目下まだ實業界とも政海とも學者には無論、なれもせず、官吏には猶更ら資格なし、車夫か土方か立ン坊か、浮世の巷に足の踏出す方角を考へ中です、はッはッはッ

いかなる志慮ありてか、五千圓の包み金を受けし後、これを入るだけづゝ引出して食ひ盡すまでは脳味噌の休養時代と稱し、現在その手に轉げ込で自由自在なるべき十萬圓の資金すら顧みず、事實は遺憾なく保險會社の難關に保證せられし結果、あれほどの手腕を空しく谷中の青葉がくれに藏めて、相變らず世話女房お常に朝夕の小兒めいたる馬鹿さ加減を笑はれながら、なほ飽足らずや、をりゝ例の築地へ押掛けて用もないに悠々と坐り込み、

お歌を相手の罪もない諧謔百出、食はざれば饒舌り、饒舌らざれば食ひ、食はず饒舌らざる時は、ぶらゝと的なき市中を懐手のまゝ徘徊て、つまり一個の遊民となりぬ、されど元來が平凡を逸し無事を脱出で、突發的に生れたる案外物、朝は必ず都下の十七新聞に一種異様の眼光を注ぎ、夜は遅くまで新刊の書籍雜誌に倦ます頭を埋めて、たまゝ不思議に算盤珠を弾く事あり、動もすれば今戸焼の達磨然と壁に對ふて沈黙考する事あり、いづれにしても此奴の近き將來は諺にいふ寢て果報を待つ徒食の遊民にあらず、怠惰者の好遁辭たる燕雀いかで大鵬の志を知るべきとは、稲田一作のため必ず多少の事實を證明せらるべし、

されば今後の運命、果して如何なる程度を以て彼に接觸し、いかなる舞臺を供へて彼を迎ふべきか、實際その程度に觸るゝまで、實地その舞臺に上るまで、天機の祕密を探り出す

道も法もなし、

稲田一作

稲田一作といふ厄介物、のそくと歩み出して以来、前後こゝに二冊となりぬ、あまり無慮遠の奴なれば、無理に一まづ押込めて差控へさせぬ、されど此奴、いつ何時また鎌首を持ち上げるやら、なるべく出る杖を打つべき覺悟なれど、それは兎も角も後の事、差當り謹んで愛讀諸君の雅量を感謝しぬ、

稲田一作完

大正五年二月一日印刷
大正五年二月九日發行

稲田一作

定價金壹圓拾錢

著者

村上信

發行者

東京市日本橋區數寄屋町三番地
飯島竹次郎

印刷者

東京市京橋區弓町二十五番地
高橋郁



發兌

東京市日本橋區數寄屋町三番地
電話本局六八四番振替東京四五五四

明文館書店

社會式株刷印協三 所刷印

村雲尼公題 浪六先生著

三五判天金類美本
定價金七拾錢
郵送料八錢

最新刊

縮刷

日蓮

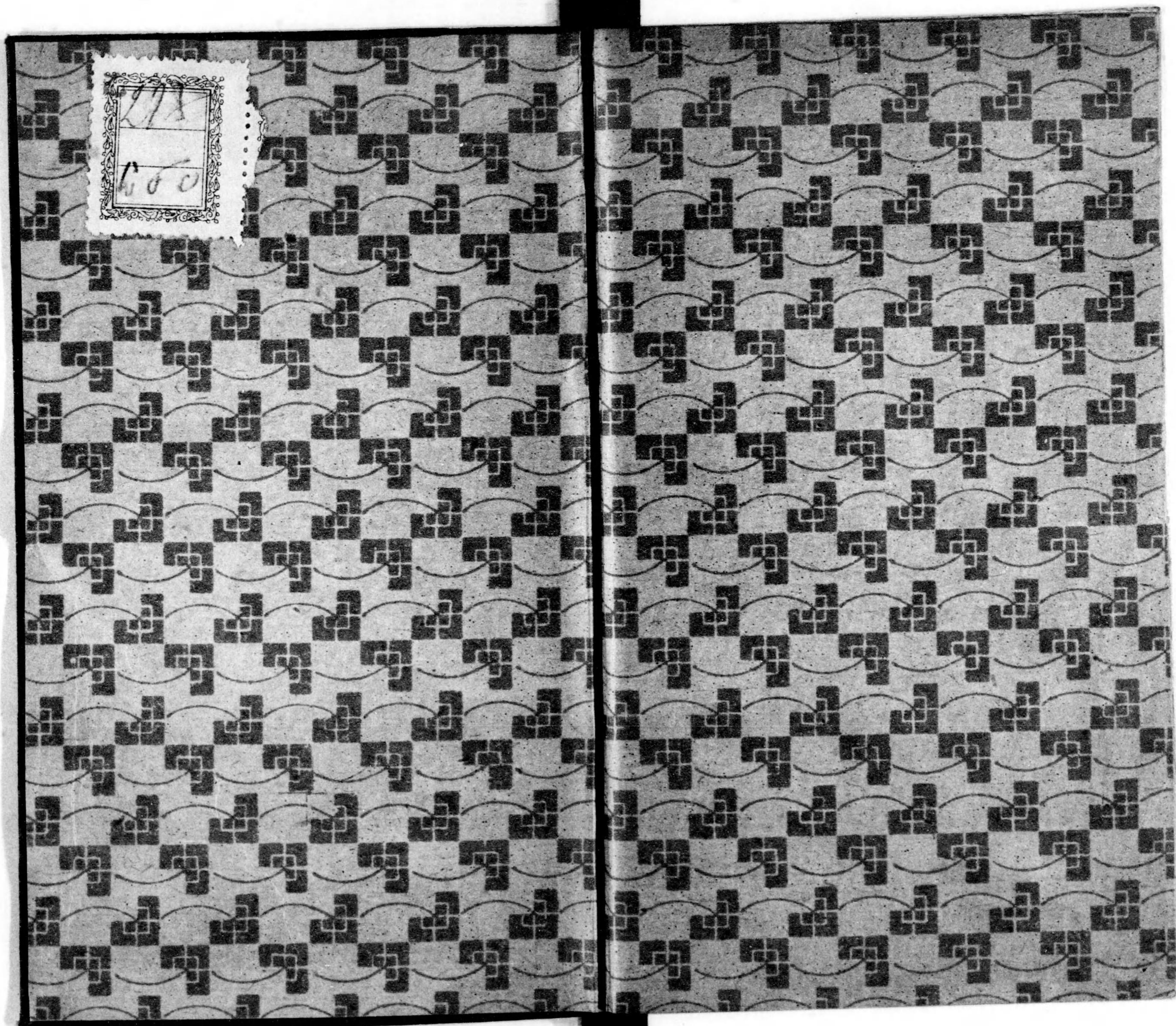
今日まで世間においてふれたる日蓮記にあらす悉く日蓮その人の遺文によりて日蓮一代の奮闘記を遺憾なく著述せしもの天下本書の外になし。

發兌元

東京市日本橋區スキャ町
振替東京四五四番

明文館書店(電話本六八四)

275
150



終

